

# 合同授業を通じた留学生と 日本人学生の異文化交流

静岡大学国際交流センター教授 原沢 伊都夫

HARASAWA Itsuo

## 1. はじめに

大学で学ぶ留学生にとって、異文化である日本にどのように適応したらいいのかという問題は、日本語を学ぶ以上に重要なテーマとなっている。筆者の教える大学でも、志半ばにして留学をあきらめ、帰国した留学生をこれまでに何人も見てきている。もちろんこのような帰国留学生のすべてが日本に適応できなかったからだとは断定できないが、もう少し異文化に対する知識があれば、帰国にはいたらなかっただろうと思える学生がいることも事実である。筆者自身の留学経験<sup>(1)</sup>を振り返ってみても、論文を担当した指導教員との軋轢などを思い出し、異文化に対する認識が深ければ、現地でももう少しうまくやれたのではないだろうかという後悔の念も強い。日本で学ぶ留学生がそれぞれの留学の目的を果たすためには、日本文化への適応の有無が大きな鍵を握っていると言っても過言ではないだろう。

大学における日本語教育では、近年留学生科目である「日本事情」における異文化教育の議論が活発化している。倉地(1991)によれば、1980年代以降、次々と日本語・日本事情教育の中で新しい試みが紹介され、従来の教室活動中心の伝統的な教師主導の授業展開の枠組みを超えた、学習者を主体にした教育が始まったとされる。細川(2002)でも、日本語教育自体が「日本語の知識の教授」から「コミュニケーション能力習得」へと移行しつつあることを指摘し、言葉と文化がすべて学習者個人の中にあるという、言語文化統合という立場に立つ日本語教育の推進を実践している。

今回、留学生と日本人学生との合同(混成)授業についての原稿を執筆するに当たり、他大学ではどのような試みが行われているのか、インターネットで検索したところ、かなりの数にヒットした。異文化をテーマにした授業だけでなく、日本語の授業への日本人学生の参加、英語による議論の授業、クラス間交流など、様々な取組が行われている。考えて見れば、クラスの中に一人でも留学生が混じっていれば混成授業と言えるわけだが、本稿で言及する合同(混成)授業とは、留学生と日本人学生の数の比率において大きな偏りがなく、講義形式ではない双方向型の授業という意味で扱うことにする。また、イベントのような単発的な授業ではなく、継続的な授業であるという点も付け加えたい。

筆者は2004年から留学生科目の中で異文化コミュニケーションをテーマにした日本人学生との混成授業を開講し、試行錯誤を繰り返しながら、どのようにしたら留学生および日本人学生の異文化能力の向上がはかれるか、実践を試みてきている。本稿では筆者の取組の一端を報告しながら、合同授業における異文化教育のもつ意義について報告したいと思う。

## 2. 授業の概要

授業の目的を異文化コミュニケーション能力の向上とし、日本語上級クラス（日本語能力試験N1程度）または学部留学生のために開講されている日本事情科目（日本語能力試験N1以上）で授業を行った。留学生の数は10名から15名で日本人学生の数も10名から15名程度である。この混成クラスは留学生のためのクラスであるため、日本人学生には残念ながら単位は出ない。国際交流センターが主催する留学生支援ボランティアの学生の中から継続して出席できる学生を公募し、授業に参加してもらった。使用言語は日本語であるため、留学生には上級レベルの日本語力が要求されるが、日本語力の高い留学生に限ってしまうと、特定の国からの留学生ばかりになってしまうため、より多くの国籍の学生にも参加してもらうために、日本語能力試験N2～N3程度の学生でも意欲があれば履修を認めることにした。これにより、様々な国籍の学生が参加する国際的なクラスとなった。参加者の国籍は、たとえば、2008年前期では、韓国5名、フランス3名、カナダ1名、ドイツ1名、中国1名、ロシア1名、ベトナム1名、ポーランド1名、日本人9名の合計23名であり、2010年度後期では、韓国12名、中国2名、ドイツ2名、アメリカ1名、タイ1名、ベトナム1名、日本人7名の26名であった。

授業時間は、通常の大学で行われている時間数と同様に、週1回1コマ90分の授業が15回である。授業は異文化コミュニケーションの基礎的な項目を扱い、全15回の内容を項目別に挙げると、「異文化を理解する」「文化とは（その1）」「文化とは（その2）」「異文化適応」「違いに気づく」「自分を知る」「非言語コミュニケーション」「異文化への認識」「差別を考える」「異文化受容のプロセス」「異文化トレーニング」「シミュレーション」「世界の価値観」「アサーティブコミュニケーション」「多文化共生社会実現に向けて」となっている。

## 3. 授業方法

多くの混成授業で行われているように、この授業でも講義型の知識の伝達だけでなく、学生が自由に議論したり、活動に参加したりするようなスタイルを重視した。特に開発教育で行われている参加型学習の方法論を取り入れることで、学習者が主体的に学べる環境を整えた。筆者の授業でも、ディスカッション、シミュレーション、ロールプレイ、ブレインストーミング、自己診断チェック、ゲームなどの参加型手法を駆使し、より多くの学びが実感できるように試みた。これらの手法に共通する特徴として、「学習者の緊張を解き、その場の雰囲気と和ませる中で、学習者が持っている知識や経験、個性や能力を引き出し、相互の意見交流や相互理解を促進すること、そしてその過程で学習者が新しい発見をしていくことを重視していること」<sup>(2)</sup>が挙げられる。参加型学習で特に重要視されるのが、授業に参加すること自体が授業のねらいや内容と一致しているということである。つまり、授業に参加し、異なる文化背景を持つ人とコミュニケーションすることが、日常生活における異文化コミュニケーションそのものと重なるわけである。

このような取組における学びとは学生それぞれによって異なり、正答のような決まりきった答えがあるわけではない。10人の学習者がいれば、10の異なる学びがあり、

教師はファシリテーターとして学習者の学びが深まることを側面からサポートする役割を担うのである。そこでは、それぞれの学習者の経験やレベルに応じた学びや気づきがあるという立場で、学習者の意見を尊重する姿勢が重要であり、それがより大きな学びや気づきにつながっていくのである。

学習者自身が主体的に学びを深めるために、3回の授業に1回の割合で感想文を課した。最終感想文を入れると、全部で5回になる。感想文では、授業で話し合った内容を自分の経験と照らし合わせることから始まる。異文化コミュニケーションは自分と他人との交流が原点であり、毎日の生活そのものが異文化コミュニケーションであることを実感することが重要であるからだ。教師は感想文を読み、批判はせず、肯定的なコメントを書き込み、学習者がより深い学びや気づきにつながるようなサポートを行う。これにより、学習者と教師との間に信頼関係が醸造され、学習者一人ひとりの内面までに踏み込んだ、より深い学びの具現化が可能となる。

#### 4. 合同授業における留意点

これらの授業に対する学生の評価（5点評価）について、今手元にある資料から紹介すると、総合評価が4.5（2008年）、4.7（2009年）、4.7（2010年）で、異文化能力を高めることができたかという設問については、3.9（2008年）、4.6（2009年）、4.2（2010年）という結果であった。アンケートの詳細な分析はここでは紹介しないが、これらの取組を通し、以下のような留意点があることを感じる。

合同授業のような新しい授業システムにおいては最初のクラスで授業の目的やねらいを学習者にしっかりと伝える必要がある。ほとんどの受講生はこれまでの教育の中で、教師＝教える人、学生＝知識を与えられる人、という構図が身に付いており、自分で考え、自分で学びを深めていくスタイルに戸惑う学生も多い。最初の頃は、授業でやった内容以外に何を学ぶのかといった声も聞かれ、こちらの意図するねらいが必ずしも理解してもらえなかった。そのため、最初の授業だけではなく、必要に応じて学生には根気よく主体的に学ぶ意義を説明していく必要がある。また、授業3回に1回提出する感想文も、当初は「エッセイ」や「小論文」などとしていたが、難しそうな固いイメージがあったため、感想文として気楽に書けるようなスタイルに改めた。この感想文では、必ず授業内容を自分自身の体験や経験と結びつけて書くように促し、理論と実践の結びつきを実感できるように努力した。これについても、ただ感想文を書くように指示すると、授業でやった内容を項目別にまとめて書いたり、文献から調べた内容を書いたり、こちらが期待するような内容ではない学習者も多い。この授業の目指すものは実践的な学びであり、実生活との関連性が重要であることに、感想文へのコメントを通し、何度も繰り返し、気づかせる必要がある。

異文化クラスの授業では、主にグループワークによる活動が中心となるが、同じグループではなく、毎回異なるグループで行うほうが良いと筆者は感じる。これにより、クラス全員が親しくなり、クラスとしての一体感が醸成されるからだ。お互いの信頼関係が構築されることで、それぞれの学生の自己開示度が上がり、より深い議論へとつながっていく。また、クラスの多様性に触れることで、クラスでの活動に参加することそのものが、異文化コミュニケーションであることを実感できるようになる。

このような合同授業では教師の役割が重要である。これまでの講義型の授業とは異なり、教師はあくまで脇役であり、主役は学習者である。教師は教える人ではなく、学習者の気づきや学びを支援するサポーターに徹するべきである。したがって、この項の最初でも述べたが、まずは、学習者が授業の目的をしっかりと理解し、その上で学習者自身が主体的に学んでいくという自覚を持つことが重要である。授業が成功するか否かの鍵はすべてここにかかっている。教師はこのことを自覚し、学習者が主体的に学びを深めるスタイルを確立するように努力しなければならない。

## 5. おわりに

混成授業における日本人の役割は重要である。留学生は日本という異文化の中でもがき苦しんでいることが多い。そこで感じる疑問点、理解できない点などを率直に日本人にぶつけることができるからだ。授業に参加する日本人が留学生の抱える問題の当事者ではない点も気楽に意見交換できる理由にもなる。また、多くの国籍の学生と話し合うことで、自文化の価値観とは異なる価値観がたくさんあることを体感し、日本以外の他文化への理解も深まる。これは普段から交流の多い他の留学生との関係改善にも役立つ。異文化の授業を通して、他国の文化に対する偏見がなくなったという声もよく聞いた。

混成授業に参加する日本人にとっては、留学生クラスはまさに異文化交流の現場となる。いままで当たり前前に思っていた考え方や行動が、実は日本文化だけのものであり、他国の目から見ると決して当たり前ではないことに気づくことは重要である。また、普段異文化について考えることのない日本人であっても、実は日本人同士のコミュニケーションが異文化コミュニケーションであることを知り、改めて自身のこれまでの生活を振り返る良い機会になるだろう。

留学生にしる、日本人学生にしる、多くの国籍の学生と交流することは、自文化を改めて考え直すきっかけとなる。アンケートには、今まで自分が知っていると思っていた自文化を全然知らない自分に気づいたというコメントがいくつも見られた。さらに、自文化の原点とも言える個人の文化、つまり、アイデンティティへの関心も高まる。異文化コミュニケーションとは結局のところ自分と他人との交わりであり、そこから、自分自身のアイデンティティを確立していくことがこうした授業の最終目的ではないだろうか。留学生と日本人学生が、多くの異なる文化が交わる授業の中で、個人のアイデンティティの重要性に気づき、それを確立していくきっかけとなることが、こうした合同授業の持つ最大の効果であると筆者は痛感する。

<注>

- (1)筆者は1983年から3年間、オーストラリア国立大学の大学院で言語学を学ぶ機会を得た。  
(2)開発協会(2003)『参加型学習で世界を感じる 開発教育実践ハンドブック』を参照。

<参考文献>

- 岡崎眸(2008)「日本語ボランティア活動を通じた民主主義の活性化—外国人と日本人双方の『自己実現』に向けて」
- 開発協会(2003)『参加型学習で世界を感じる 開発教育実践ハンドブック』(特活)開発協会
- 倉地暁美(1991)「異文化間コミュニケーション能力開発のために」『異文化間教育5』異文化間教育学会
- (1994)「ジャーナル・アプローチの展開—日本語・日本事情教育の新しい方向に向けて—」『日本語教育82号』日本語教育学会
- 原沢伊都夫(2009)「留学生と日本人学生との混成授業における実践報告—異文化コミュニケーション能力育成に向けて—」『国際交流センター紀要』第3号、静岡大学国際交流センター
- 細川英雄(編)(2002)『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社